

## 報 告

## 女子学生の性意識・性行動に着目して

—大学における「セクソロジー」の授業の効果—

富 田 道 子<sup>1</sup>

## 抄 録

本研究の目的は、大学におけるセクソロジーの授業の意義を、女子学生の性意識や性行動の揺れや変容から明らかにすることにある。セクソロジーの双方向型授業を試みたところ、次のことが明らかとなった。

第1に、学生は性の科学的な知識を身につけ、性に対する主体的な姿勢の大切さと、それが相手を尊重することにつながることを理解できた。

第2に、学生は性に関する正確な言葉や概念を獲得することで、自分の気持ちを相手に伝えることができるようになった。

第3に、学生は性の授業のなかで、「自分はどう生きたいのか」を自問自答する作業を行っていた。

第4に、家庭生活や仕事上ではジェンダーバイアスのない学生であっても、一度セクシャルな場面になると、性別に関わりなく、それらに縛られる現実があることにも気づくことができた。

これらのことから大学におけるセクソロジーの授業が学生に一定の効果をもたらすことを期待できると捉えた。

**Key words:** セクソロジー, 女子学生, 性意識, 性行動

## 1. 研究の背景と目的

## 1.1 研究の背景

家庭科はその成立過程から、長年「良妻賢母」「女子特性論」に基づく教科として位置づけられてきた<sup>1)</sup>。このことは、高等学校家庭科が1960年から30年間、女子のみ必修であったことに象徴される。

1989年の高等学校学習指導要領改訂時に家庭科の男女共学必修が実現するが、その背景に国際女性

年、女子差別撤廃条約をはじめとする人権に関わる国際的な進展があったことは言うまでもない。高等学校家庭科の教科書には、「ジェンダー」「セクシュアリティ」「青年期のからだの変化」「青年期の恋愛」といった文言が盛り込まれた。その後、1994年のカイロ国際人口・開発会議で採択された「リプロダクティブ・ライツ（生殖に関わる権利）」に対し、1995年の北京女性会議で同性愛者の人権尊重の視点から疑問視する動きが起こるなか、性に関するすべてのことがその人の基本的人権にかかわると捉えられるようになり、家庭科においてもジェンダー／セクシュアリティを題材にした授業実践や研究が積

受稿：2014年8月28日 受理：2014年11月17日

<sup>1</sup> 広島都市学園大学子ども教育学部子ども教育学科  
広島市南区宇品西5丁目13-18

み重ねられていった<sup>2)-6)</sup>。

しかし、1990年代後半からジェンダー／セクシュアリティにかかわる教育や施策を曲解し、「家族を解体させる」「性交をすすめる」というような文言を使用したバッシング<sup>7)</sup>が組織的に起こり始めると、1999年に告示された高等学校学習指導要領では、教科の重なりを避けるということを理由に「性」は主に保健体育で取り扱うことになり、家庭科では妊娠・出産にかかわる「性」のみを取り扱うことになってしまった。つまり、家庭科の教科書から先述した「ジェンダー」「青年期の恋愛」等の文言がすべて抜けたのである。

富田<sup>8)</sup>はこれに対し、家庭科における性の学習を、保健体育で扱う「生涯を通じる健康」ととどまるものではなく、ライフマネジメント力を育てるための学習と捉えた。換言すれば、家庭科における性の学習の独自性は、恋愛、マイノリティの性（性同一性障害、同性愛など）、デートDV、ハラスメント、性交と避妊、妊娠、人工妊娠中絶、出産など、生徒がリアルに捉えられる現実を題材に、性的自己決定力を持ち、自己と他者、双方の健康といのちを守ること、人権の尊重、共生について考えることにあると提唱した。

## 1.2 研究の目的

1998年に起きた大学生による集団性暴力事件2件を発端に、1999年に2件、2003年には7大学の学生から成る「スーパーフリー」事件、その後も2004年に2件、2005年に1件、同様の事件が報道された\*。2009年の事件\*\*を境に、大学生が集団で引き起こす性暴力事件の報道がなくなったのは、多くの大学に「キャンパス・セクシャル・ハラスメント防止委員会」が設置され、防止のための措置が定められたためと推測される。

しかし、近年、横浜市、三鷹市のストーカー殺人

事件をはじめ、性・いのちにかかわる様々な事件が頻発し、中等教育段階までに「保健」や「家庭科」で十分な「性」についての授業がなされていない現状<sup>9)</sup>を考えると、若者の人権意識が高まっているとは言えない。

高等教育における性の研究に目を向けると、大学生の性知識・性意識・性行動の実態調査を分析した報告はある<sup>10) 11)</sup>が、体育・健康系の大学以外で、半期間継続した授業を行った上での調査、分析は少ない<sup>12) 13)</sup>。櫛田<sup>12)</sup>は教員養成系大学の学生に対し、「性に関する幅広く多面的な知識を修得させ、現実的場面で対応できるような資質の向上」を目的に、教育基礎論の講義の中に性に関する内容を取り入れたことを報告した。そのなかで、学生の反応に授業改善の必要性を感じたことから、性の授業を独立させ、講義担当者を複数にし、講義をオムニバス形式に変えたと述べている。また、皆川<sup>13)</sup>は「より健康的で豊かな性の感覚とマナーと行動が出来る人づくりは教育上必須」と考え、公衆衛生学の立場から性の授業を行い、学生の感想を紹介している。しかし、多様な人々との共生や対等な関係性を考える授業で、学生の性意識や性行動に注目し、質的に分析した報告はない。

そこで本研究では、セクソロジー (sexology) に関する筆者の双方向型授業\*\*\*を受けた学生の意見や学びのまとめから、学生の性意識や性行動を探索的に求めながら、大学におけるセクソロジーの授業のあり方に対する示唆を得ることを目的とする。

なお、セクソロジーという用語について、この言葉を初めて使用したドイツの皮膚科医イワン・ブロッホ<sup>14)</sup>は「性生活の問題を純粋に医学的に扱うことは、確かに性科学の中核をなすことではある」としながら、「人間の生活のあらゆる分野に対する、性の多面的な関係を正しく把握する必要がある」とも述べた。また、大学におけるセクソロジーの授業

\*1998.日本体育大学アイスホッケー部、帝京大学ラグビー部/1999.慶應義塾大学医学部生、中央大学法学部/2003.学習院大学・慶應義塾大学・産能大学・東京大学・日本大学・法政大学・早稲田大学合同イベントサークル/2004.国士館大学、日本体育大学スキー部/2005.京都大学アメリカンフットボール部

\*\*2009.京都教育大学体育領域専攻学生

\*\*\*木野は双方向型授業を「学生と教員および学生同士の間での授業コミュニケーションを積極的に授業展開の中に取り入れる授業のことである。」と定義し、「コミュニケーションの取り方には、直接の対話、紙ベースでの対話、ICT（情報通信技術）ベースでの対話に三分される。」とした（木野茂、学生とともに作る授業。大学を変える、学生が変えるー学生FDガイドブック、初版第1刷、京都：ナカニシヤ出版：2012、p.30-38）

Table 1 「セクソロジー」修正シラバス

回	テーマ
1	大学生の意識調査から／ライフマネージメントとしての性
2	性差・性分化についての概説
3	性的マイノリティ（多様な性）とリプロダクティブ・バイアス
4	月経と妊娠
5	人工妊娠中絶の現実とその背景
6	リプロダクティブ・ライツ I（中絶に関する DVD から考える）
7	人工妊娠中絶をめぐる国の政策
8	出生前診断
9	リプロダクティブ・ライツ II（DV に関する DVD から考える）
10	性暴力 I－DV，デート DV を中心に－
11	性暴力 II－レイプ，ハラスメントを中心に－
12	性行為感染症の現実とその背景
13	産む・生まれる
14	産めない－ワーク・ライフ・アンバランスと不育症・不妊症－
15	共生への展望と課題      まとめ

実践者である村瀬幸浩\*はこの用語について、「性を論理として、学問体系として定着させるために、『sexuality』ではなく『sexology』を使った。性をめぐる科学と人間関係を柱とした学問である」と述べた。これらから、筆者はセクソロジーについて「性を科学的に捉えるだけでなく、ジェンダー視点を中心に、社会的、文化的視点など様々な角度から考察しながら、自分自身を知り、他者との関係を構築する力、性的自己決定力をつける学問」と捉えている。

## 2. 研究方法

### 2.1 調査対象者・授業実施期間

対象は、筆者が勤務していた関東地方の私立 A 女子大学で、共通カリキュラムに位置づけられている「セクソロジー」の授業を受講した学部 2・3・4 年生の計 153 名である。授業実施期間は 2012 年 9 月から 2013 年 2 月までであった。ただし、就職活動による欠席者がいたため、対象者の人数は授業実施日により多少ばらつきがあった。

なお、本調査は私立 A 女子大学の大学倫理審査委員会の承認を得て行い、使用したレスポンスシ

ットは A 女子大学で作成したものである。

### 2.2 授業内容

性にまつわる様々な事例から、性意識が人生設計に与える影響や主体的に生きるとはどういうことかを考察しながら、性的自己決定力の育成を目標に授業を行った。具体的には、レスポンスシートから多様な意見をを紹介することを念頭においた上で、授業者が学生全員で共有したい意見や疑問、感想等を選び、次週の授業のはじめに紹介、解説をするという双方向型授業を行った。授業開始時のシラバスを修正したものが Table 1 である。授業を進めていくなかで学生から要望が出され、テーマが 1 つ追加された。

なお、学生には十分な説明の上で個人情報保護の観点から、第 1 回目の授業でレスポンスシートへの記述について、プライベートな内容など次週の授業で紹介されたくない学生は、その旨を明記するよう指示した。

### 2.3 分析方法

分析には、14 回分の授業のすべてのレスポンスシートのなかから、気づき、学び、考え、感じたこ

\*村瀬幸浩 “人間と性” 教育研究協議会幹事。日本思春期学会理事。(財) 性の健康医学財団評議員。

とや、自らの性意識や性行動にふれる記述を用いた。その後、KJ法を用いて意見・感想等の内容を説明するテーマを探し、テーマ名のリストを作成後、類似テーマは緩やかなまとまりとして1つにし、各回の授業においてカテゴリーの記述内容の特徴を掴むことから、大学におけるセクソロジーの授業のあり方を検討した。

### 3. 結 果

分析の結果、「学び・気づき」「他者理解」「受容・了解不可能」「励まし・助言」「友人と共有」「パートナーとの関係」「暴力からの脱出」「情報交換」「その他」の9つのカテゴリーに大きく分けることができた。なお、「他者理解」は性的マイノリティの者への理解とし、「受容・了解不可能」については、性行為を、子どもを持つ目的以外の、関係性を深めるためのものとして捉えることに対する学生の考えとした。「その他」の内容には、学生が今後の生き方を考える上で振り返ったと思われる「生い立ち」、月経の授業から派生した婦人科系の「心身の疾患に関する悩み」、ワーク・ライフ・アンバランスの授業を受けて述べられた「就職活動の大変さ」、性的マイノリティの授業を受けて決意した「大学卒業後の進路（臨床心理士）」、授業を受けていて気分が悪くなった、などが挙げられる。これらの記述から、学生の授業への主体的な関わり、自己内対話、生活経験に基づく実感と授業内容が行きつ戻りつ<sup>15)</sup>する姿がうかがえるが、本研究は学生の性意識や性行動につながる記述に焦点を当てているため、本稿では『その他』でまとめた。「その他」を除く8つのカテゴリーを説明するものとして、学生の記述の詳細を以下に述べる。

#### 3.1 学び・気づき

取り扱ったすべてのテーマにおいて、学生の学び・気づきの内容では「自分の体のことをきちんと理解することができた。」「他の学生の考えを知ることができた。」「他の視点から見つめ直すことができた。」「高校の時はよくわからなかったが、ようやく納得できた。」といった記述がもっとも多かった。なかには「知りませんでした。」「月経周期の話は目からウロコ。」

というように、自分の性知識のなさに気づく記述もみられた。とりわけ、膣外射精の危険性、オーラルセックスによる性行為感染症の広がりについての授業では学生に動揺がみられたが、「私も相手も子どもは必要なく、感染症も怖いので、今はきちんと避妊をしています」のように、科学的な知識を身につけたことで、自分の健康は自分で守るという主体的な姿勢の大切さとそれが相手を守ることにもつながることを理解した記述が後にみられた。

また、「『避妊しないセックスも性暴力と同じ』という言葉聞いたとき、自分にも同じような経験があったため、心にグサッと突き刺さるものがありました。」「今までDVとレイプは別物だと思っていたが、嫌がる相手との性行為と捉えるなら、どちらも同じ。」のように、様々な事例を通して正確な言葉・概念を獲得することが双方の関係性を見直すきっかけとなり、「自分の望む通りに行動できることが重要だと思う。」「女性はもっと主体的に行動する必要がある。」と気づく記述が現れた。

「人工妊娠中絶（以下、中絶と称す）」をテーマにした授業のなかでは、学生から「出生前診断の是非について、他の人の意見が聞きたい」という要望が出たため、急遽これもテーマとして取り上げた。レスポンスシートに出生前診断に対する各自の考えを記述してもらい、記述内容をまとめたものを翌週の授業開始時に配布し、学生の考えを紹介した。その内容は、胎児に障がいがあるとわかった時に自分は産むか産まないか、そもそもこの診断を受けるか否かといったものの他に、「私の兄は自閉症です。」「従妹が障害を持っています。」「中学時代、自閉症の子どもとの混合教育だった。」「知的障害者のボランティアを通して」「週に2回、発達障害児の教育支援をしています。」のように、身近に障がいを持つ者がいる立場から自らの考えを述べる者もいた。これら学生の考えを交流し、その後さらに自分が考えたこと・気づいたことをレスポンスシートに記述するよう求めたところ、「障害があることを理由に中絶を自由にしたら、優生保護法の時代と変わらないと思います。」「教育心理学（障害児教育）の授業で発達障害の人の話を聞きました。言葉を上手に話せない人でも、人の手を借りて言葉を紡ぎ、深い言葉



を話していると聞いて正直驚きました。障害に対するちゃんとした情報を得ることがまず必要なのかもしれません。」「誰もが暮らしやすい社会・環境にすれば、胎児が障害を持っていても産もうと思うのではないかと思いました。」など、様々な角度から思考し、記述がなされていた。

### 3.2 他者（マイノリティ）理解

「性差・性分化」の授業では、初回授業で実施した「性に関するアンケート調査」で性自認について尋ねた結果を提示した。このアンケート調査は授業内での扱いに留めることを前提に実施しているため、結果の数値にはふれないが、授業後、性的マイノリティの立場を、あるいは、性自認や性的指向が自分にもよくわからないと告白した学生がその思いをレスポンスシートに記述すると、それを交流した授業以降には、「性的マイノリティの人が急に身近に感じた。」「同性愛者は非生産的存在だと思う。」「同性婚には価値がないと思う。」「その人らしい生き方をまわりの人に理解させていくためには、教育が何よりも必要だと思う。」といった記述のほか、「ホモセクシャルやレズビアンの人を異常だと思っていたが、自分の考えが変わってきた。」「人を好きになるということは、その人そのものを好きになること。性別って関係ある?」「頭では分かっているつもりだけど、本当に理解するには時間がかかりそう。」のように、学生の戸惑う様子、考えを深めていく様子が伝わるような記述もみられた。この性的マイノリティに関わる内容は、授業実施期間中の4ヶ月間レスポンスシートに記述された。

### 3.3 受容と了解不可能

授業では様々なテーマを取り上げていたが、レスポンスシートに常に記述されていたのは、性行為の意味、つまり性行為を、子どもを持つ目的以外の、関係性を深めるためのものとして受け入れられるか否か、であった。

「世の中の流れとして、大学生にでもなれば恋人と性行為をするのは当たり前、といった考えが蔓延しているように感じるのですが、私はそれが嫌だなと思っています。」「子どもを産むための行為なのに、

コンドームやピルを使ってまで性行為をする必要はないと思う。」「中絶をしなくてはならなくなった人に対し、『性行為をしなければよかったじゃん』という批判が出るが、なんだかしっくりきません。確かにその通りなのですが・・・もやもやします。」「中学・高校の性の授業は『～すべき』という風に1つの考え方を押しつけるばかりで、意見を言ったり、色々な考え方を受け入れる雰囲気なかった。自分にとって何が大切か、他の考えもあるのだろうかとか考えることが足りなかったと感じた。」などの記述がなされた。

また、批判的にならず、「危険を冒してまで性行為をするものではない、という意見もよくわかるが、正しい知識をもって幸せなセックスをする人がいてもよいと思う。」のように「言いたいことはわかるけれど自分は違う。そうはしない。」という杉原<sup>16)</sup>の提唱する了解不可能\*な意見もあった。

### 3.4 励まし・助言

「『性的マイノリティはあなただけじゃない』と伝えたくまりました。」「ろっ骨を折られた人へ、早く別れてほしいと伝えて下さい。」「自分は（性行為を）したくないのに、なぜ『相手が我慢できないから』と応じるのか。これを強引じゃないと感じているのがとても疑問です。」「相手に左右されず、自分の意思をもって行動しなければいけないです。」「認識の甘さを彼によく言い聞かせて、勉強させてあげてほしいと思います。」などのように、悩みを抱えている人、暴力を受けている人に向けて、レスポンスシートには厳しくもあたたかいメッセージが記述されていた。

### 3.5 友人と共有

レスポンスシートのなかには、「授業後、友だち

\*杉原は、教育学者の佐藤学が提唱した「学びの共同体」を取り上げ、この「学びの共同体」が持つ「対話的コミュニケーションとしての学び」について、「『対話』とは、コミュニケーションにおいて自己には相手の理解・視点に対して絶対的に了解不可能な部分があるという前提を持つコミュニケーションである。このような了解不可能性を考慮に入れないかわりには、コミュニケーションにより相手を全て教育者側の了解・計画の範疇に押し留めようとする操作的な営みにつながることになる」とした。

とその内容について話しています。」「授業でビデオを見た後、友だちとそのことについて話しました。」などのほかに、「学んだことを、友だちなどを通して多くの人に伝えていくことが大切である。」といった記述もあった。

### 3.6 パートナーとの関係

「テキスト\*をさっそく彼に見せると、思いのほか真剣に読んでくれました。これからも一緒に勉強していきます。」「彼の大学には性の授業がないので、私の話を興味深く聞いてくれます。」「お互いの考えを口に出して確かめるというのは、改めて大事だと感じました。」「彼と私のコンドームに対する認識の違いを授業で確認し、あのあと彼に伝えたところ『ごめんね』と言ってくれました。この授業を受けてから、私は知識を得て強くなりました。」「コンドームをつけてくれるようになりました。『えらいね、えらいね』と褒めてのばしていこうと思っています。」「明日、彼の誕生日です。性行為を求められていますが、今日の授業でやめようと思いました。」などの記述がみられた。

### 3.7 暴力からの脱出

「私はいつも相手に合わせてしまい、自分の言いたいことがあまり言えないので、悩んでしまうことがあります。」「彼はまだ付き合って間もないのに、自分の都合のよい解釈しかしません。」「彼の『大丈夫』という言葉に信じていました。」「別れたくないから、相手の要求に応じてきた。」といった記述と、それを受けてある学生が「大学に入ってジェンダーについてたくさん学んできたけど、こういうセクシュアルな視点から考えたことはありませんでした。職業や子育て以上に、セクシュアルな話になるとジェンダーバイアスは深刻だと思いました。」と述べているように、社会における対等な人間関係の重要性を理解していても、性の場面において女子学生は、自分の気持ちを抑え、相手に合わせた行動をとりがちであることがみえてきた。しかし、時間の経過とともに「授業の翌日、彼と話し合いました。

私の気持ちを尊重してくれると言ってくれ、これからは心からつきあいを楽しめる気がしました。」「これまでの彼との関係はあまり良いものではありませんでしたが、お互いにこれからのことを話すうちに、二人の関係が変わってきました。」「今まで我慢することが多かったが、最近は嫌なことには『No』と言えるようになった。」「自分の気持ちを最優先したい。」など、交際相手との関係を見直す記述が出てくるようになった。

また、デートDVなどの授業では、「自分が暴力の加害者だった」と気づく記述も複数あり、暴力の加害者に性別は関係ないことをクラスで共有できた。さらに、男性がメディア以外に「性」を学ぶ機会がないことを指摘する者が複数おり、「間違った情報を植え付けられた彼らも、ある意味被害者ではないか」という記述から、男性にも豊かな性の学びがなければ、相手の気持ちを押し量る言動はとれないと捉えているように思われた。

### 3.8 情報交換

子宮内膜症などの治療や体調管理のために、病院で検診を受けていることを記述する学生が一定数おり、低用量ピルが決して避妊のためだけのものではない\*\*ことの実感が深まるとともに、どこの病院が丁寧な説明をしてくれ、不安を取り除くような配慮等をしてくれるのかといった情報交換などもなされた。

学生の記述内容を9つのカテゴリーに分類した結果はTable 2の通りである。レスポンスシートに複数の内容が記述されているものは、それぞれを分けて分析し、解析した。

「学び・気づき」「励まし・助言」「情報交換」における記述数は、各授業の内容に対して反応したものが多くを占めるが、「他者理解」「受容・了解不可能」「友人と共有」「パートナーとの関係」「暴力からの脱出」については、授業の内容如何に関わらず、

\*村瀬幸浩、SEXOLOGY NOTE、第1刷、東京：十月舎；2004。

\*\*現時点では、月経困難症、子宮内膜症、機能性子宮出血、卵巣機能不全などの婦人科疾患の治療薬として処方されている（島崎継雄、性科学、現代性科学性教育事典、第1版第1刷、東京：小学館；1995.p.104）。

Table 2 レスポンスシートの分類

回	分類 テーマ	学び・ 気づき	他者 (性的マイ ノリティ) 理解	受容・ 了解不可 能	励まし・ 助言	友人と 共有	パート ナーとの 関係	暴力から の脱出	情報交換	その他	記述数 総合計	8分類 の記述合計 数 (%)
1	ライフマネージメントとしての性	104	0	0	0	0	0	0	0	81	185	104 (56.2)
2	性差・性分化	70	66	12	0	12	24	0	14	46	244	198 (81.1)
3	性的マイノリティ	106	25	8	1	12	19	0	5	62	238	176 (73.9)
4	月経・妊娠	131	1	5	0	4	25	4	0	55	225	170 (75.6)
5	人工妊娠中絶	184	1	9	1	1	13	3	0	36	248	212 (85.5)
6	中絶に関するDVD視聴	148	8	10	15	7	32	6	0	64	290	226 (77.9)
7	人工妊娠中絶をめぐる国策	182	2	20	13	7	34	12	4	54	328	274 (83.5)
8	出生前診断 交流	107	0	0	0	0	0	0	0	64	171	107 (62.6)
9	DVに関するDVD視聴	75	3	16	3	19	24	41	0	28	209	181 (86.6)
10	DV・デートDV	95	1	1	9	10	12	35	0	33	196	163 (83.2)
11	レイプ・ハラスメント	164	1	5	4	12	8	24	0	20	238	218 (91.6)
12	性行為感染症	141	11	4	3	9	15	6	0	12	201	189 (94.0)
13	産む・生まれる	174	0	7	0	4	3	2	0	37	227	190 (83.7)
14	産めない 不育症・不妊症	222	0	0	0	14	5	0	0	28	269	241 (89.6)
分類別 記述数合計		1903	119	97	49	111	214	133	23	620	3269	2649 (81.0)

継続して記述がなされていた。8分類別にみると、記述数は「学び・気づき」が1903と最も多かった。

#### 4. 考 察

今回、筆者はセクソロジーの授業に関する双方向型授業を女子学生に行い、学生たちの性意識・性行動について検討した。学生の性に関する知識は、3.1でふれたように十分とはいえない。初等・中等教育段階の授業で「性」を扱っていたとしても、それは学生のレスポンスシートに記述された文言を借りれば、「自分のこととして受け止めていなかった」ために忘れたのだと推測した。また、記述のなかには「高校で保健の授業はあまりなかった。」「性の分野は試験に出ないと言われ、勉強しなかった。」というものもあり、高等学校における保健の授業の扱いに学校差があることもわかった。

「学び・気づき」のカテゴリーにみられた「この授業をきっかけに、自分の体のことをきちんと理解することができるようになった。」「講義を受けるた

びに、自分の体についてきちんと考えようと思えるようになりました。」などの記述から、授業回数を重ねるなかで学生の性に関する知識が増えたことが、性意識や性行動に変化をもたらしたと考えられる。さらに、学生は自らの生活や他の授業での学びなどを繋ぎ合わせ、「出生前診断」の授業を導き出した。この授業のレスポンスシートから、学生のなかには障がいを持つ者が親族や友人にいたり、学外での活動で関わっていること、加えて、心理学、社会学、比較行動学など、様々な授業で障がいをテーマに授業が展開されていることもわかり、「出生前診断」の授業は彼らの体験や他の授業で得られた学びも反映されていると考えられる。

「他者理解」における記述内容から、学生が性自認、性的指向についてレスポンスシートを通して告白したことで、「テレビのなかの話だと思っていた」学生や「偏見を持っていた」学生にとって、性的マイノリティ当事者の存在やその生活、悩みをより身近に捉えられるようになったと考えられる。マイノリティ当事者である学生が告白できたのは、匿名性が



保たれた空間で授業が行われたことによると思われる。

「受容・了解不可能」において、学生は性にまつわる様々なテーマを通して、性行為の意味を考え続け、どういう生き方が正しいのか、そもそも生き方に規範があるのか、意見が分かれ、戸惑う者もいることがわかった。考えの違いによる批判的記述がなかったため、学生は自由に自分の考えが述べられたようである。

「励まし・助言」では、様々なかたちの暴力と向き合っている学生たちの悩みに対し、同じ時間・空間を共有する他の学生から、レスポンスシートを通して励ましや交渉技術などの助言が出された。学生は主体的に授業に参加し、共に学びながら問題解決の道を探っていたと思われる。

「パートナーとの関係」には、交際相手と知識を共有する者、自分の気持ちを率直に伝えようとする者、考えた末に関係を断ったとする者の記述があった。次の授業でこれらの交流があったことが、「次に会った時に、もっときちんと話そうと思う。」「相手とちゃんと話をしないと前に進めないと思ったので、勇気を出して言った。相手は理解してくれた。」というように、他の学生のパートナーとの関係を見つめ直すきっかけに繋がったと思われる。

「暴力からの脱出」における記述内容から、暴力の概念を学んだことが「つきあうことは、セックスをすること」と刷り込まれていた学生の性意識や性行動に変化をもたらしたと推察される。

セクソロジーの授業におけるレスポンスシートの記述内容から、学生の性に関する知識の深まりと、学生のなかに起こった学びの相互作用により、性意識や性行動に揺れや変容を確認することができた。よって、大学におけるセクソロジーの授業は学生に一定の効果をもたらすことが期待できると捉えた。

景井充<sup>17)</sup>は『双方向型講義の設計思想』において、構想する講義空間を学生・教師・学問的世界のトライアングル構造とし、それぞれの間で何らかの双方向的なやりとりが存在していることを示した。

本研究ではこれをセクソロジーの授業における双方向的なやりとりに援用し、その効果を概念図化した (Fig. 1)。その特徴としては、学生の性意識・性

行動に関するセクソロジーの授業において、景井の講義では存在しない学生以外の者、つまり学生の友人や交際するパートナーも間接的に関わっており、それらの者と学生との双方向的な関係も明示した。さらに、これらのやりとりが性のリスク回避につながることも示した。

以上の結果から、行動範囲や人間関係が広がる高等教育段階において、「性」の学びは大学生活を充実したものにし、将来の自分の生活設計を考え、人間力を兼ね備えた社会人を目指すキャリア教育の1つとして、すべての学生に必要ではないかと考える。

とりわけ、教員養成系大学の学生においては喫緊の課題と考える。

その理由の1つには、2012年4月に文部科学省初等中等教育局児童生徒課およびスポーツ・青少年局学校保健教育課が、「児童生徒が抱える問題に対しての教育相談の徹底について」を各都道府県・指定都市教育委員会に通知したことにある。内容は、人権尊重の意識の高まりのなかで、性同一性障害のある児童生徒の不安や悩みをしっかりと受け止め、児童生徒の立場から教育相談を行うことを求めたものになっており、対応者の筆頭に「学級担任や管理職」が挙げられているからである。

2つには、1999年当時の文部省が「セクシュアル・ハラスメントの防止等に関する規程」を制定し、同年、各都道府県・指定都市教育委員会教職員人事主管課長あてに「公立学校等における性的な言動に起因する問題の防止について」を通知しているにもかかわらず、文部科学省発表の「公立学校教職員の人事行政状況調査」における「教育職員に係る懲戒処分の状況について」によると、「わいせつ行為等」での処分は訓告等も含め、2010年度が175件、2011年度が170件、2012年度は167件と報告されており、処分事案の相手の約半数が自校の児童生徒であることが明らかになっているからである。ただし、被害を声に出せない児童生徒がいる可能性や、学校内に「指導」という名のもとに様々なハラスメントが存在することを考えると、被害者数は先の報告数をはるかに超えるであろう。

これらを併せ考えると、教員をめざす学生には、



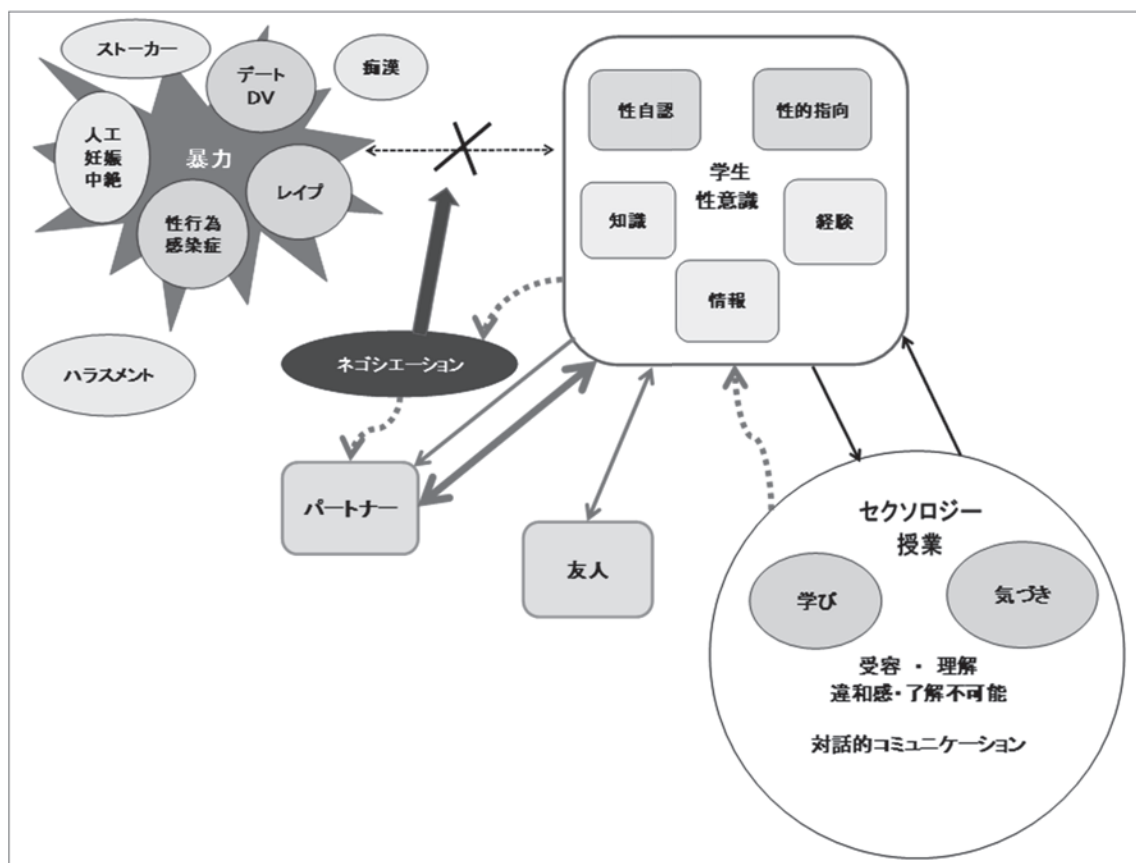


Fig.1 学生の性意識・性行動に関するセクソロジー授業の効果

性知識の正しい理解に留まらず、人権の視点から性・いのちを捉える力、豊かな感性が求められる。そこで、国立大学法人の教員養成系大学 44 校と、同法人の教員免許状が取得可能な大学 32 校の計 76 校について、大学ホームページで 2014 年度に開講されているシラバスを閲覧したところ、「性」の授業が科目として設定され、専任教員が授業担当者となっている大学はまだ 3 大学と少ない。

今後は、先述した 3 大学を中心に性の授業内容・方法について実態調査をし、これまで教員養成系大学において学生を小学校現場に送り続けてきた教員へのインタビュー調査も行いながら、教員としての資質向上をめざした「性」の授業内容を検討したい。

## 5. まとめ

筆者は、女子学生に性意識・性行動に関するセクソロジーの双方向型授業を行い、レスポンスシートを用いて学生の記述内容を検討した。その結果、本授業で学生の他者との関係を構築する力、性的自己

決定力を高める効果が期待できることを明らかにした。

今後の研究では、高等教育における「性」の講義内容や授業機会などを調査した上で、一般教養ではなく、まずは教員としての資質向上をめざした「性」の授業内容を検討したい。

## 引用・参考文献

- 1) 岡村喜美, 武井洋子. 女子中等教育における家庭科教育方法の歴史的研究－高等女学校令以前の家庭科教育について. 日本家庭科教育学会誌. 1970; 11: 1-9.
- 2) 富田道子. 中高生のカップルはシンパイ?－中高生の性意識と性の関係. 月刊生徒指導 1992; 22 (16): 140-142.
- 3) 小川裕子, 佐藤尚美. 家庭科における性教育の特徴と課題－家庭科教育研究者連盟による実践報告の分析から. 静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇. 1996; 27: 175-186.
- 4) 岩田利美. 家庭科におけるセクシュアリティーの教育. 家庭科教育 1998; 72 (8): 12-16.
- 5) 富田道子. ジェンダー観・性別役割分業意識の変容

- を促す授業教材の検討. 東京学芸大学大学院教育学研究科修士論文
- 6) 富田道子. 多様化する家族－自分らしくありのまま. 季刊 SEXUALITY 2010 ; 46 : 60-65.
  - 7) 浅井春夫, 子安潤, 鶴田敦子, 山田綾, 吉田和子. ジェンダー／セクシュアリティの教育を創る－バッシングを超える知の経験. 初版第1刷. 東京：明石書店；2006. p.3-4.
  - 8) 富田道子. ライフマネージメントとしての「性と生」の学習－高等学校家庭科教育の可能性. 家庭科研究 2010 ; 290 : 46-51.
  - 9) 田代美江子. 「性の多様性」を前提としたジェンダー／セクシュアリティ平等を目指す教育の意義. 家庭科研究 2014 ; 318 : 10-15.
  - 10) 栗原淳, 中西雪夫. 大学生のセクシュアリティに関する研究. 佐賀大学教育学部研究論文集 1992 ; 39 (2) : 1 -11.
  - 11) 田村公江, 細谷実, 川端智子, 田中俊之. 大学生の性意識調査. 龍谷大学国際社会文化研究所紀要 2012 ; 14 : 259-304.
  - 12) 櫛田眞澄. ジェンダー論を超えて－大学における「セクソロジー教育」の実践. 家庭科教育 2002;76 (1) : 15-19.
  - 13) 皆川興栄. 性・エイズ教育論の授業実践と学生の学び. 尚美学園大学総合政策研究紀要 2011 ; 21 : 59-81.
  - 14) 島崎継雄. 性科学. 現代性科学性教育事典. 第1版第1刷. 東京：小学館；1995. p.242.
  - 15) 秋田喜代美. 対話が生まれる教室－居場所感と夢中を保障する授業. 第2刷. 東京：教育開発研究所；2014. p.12-13.
  - 16) 杉原真晃. 大学教育における「学習共同体」の教育的考察のために. 京都大学高等教育研究 2006 ; 12 : 163-170.
  - 17) 景井充. 双方向型講義の設計思想－産業社会学部コア科目「人間と文化」での試みから. 立命館高等教育研究 2005 ; 5 : 1 -15.

# **Focusing on sexual consciousness and sexual behavior of female university students : an effect of “Sexology” in the university**

Michiko TOMITA<sup>1</sup>

## **Abstract**

This study aims to identify the significance of “sexology” in the university curriculum and changes in sexual consciousness and behavior among female university students. As a result of holding an interactive class on sexology, I identified the following factors:

- (1) The classes helped the students acquire scientific knowledge on sexuality and recognize the importance of independently protecting one’s mind and body. Moreover, such knowledge helped them understand the importance of respecting other people’s feelings.
- (2) Learning accurate terminology and views of sexuality helped the students express their feelings more clearly.
- (3) During the class, the students asked themselves the question “How do I want to live my life?”.
- (4) The class helped the students realize that even those without gender bias in housework or the workplace may have gender bias in sexual situations, regardless of their sex.

These results suggest the effectiveness of providing classes on Sexology at universities.

**Key words:** sexology, female university students, sexual consciousness, sexual behavior

---

<sup>1</sup> Department of Childhood Education, Faculty of Childhood Education, Hiroshima Cosmopolitan University  
5-13-18 Ujinanishi, Minamiku, Hiroshima 734-0014, Japan